

万葉の虚実

——持統天皇と草壁皇子——

黛 弘 道

黛でございます。専門が違いますので、実は文学のこととは私にはよく判りませんが、丁度同じ時代の歴史をやっておるものですから、関心だけは人並みに持っているわけです。

実は『万葉の虚実』というテーマでお話を、ということでありますが、「未だ虚を知らず、安んぞ実を知らんや」ということでありまして、歴史の方の真実さえなかなか掴みかねているわけでありますから、皆様、あるいは主催者の御要望や御期待にはたぶんそえないであろうと思います。

今日、私が用意して来ましたことは、実は人麻呂にも関係があることですが、持統天皇と草壁皇子についてであります。私が草壁皇子について万葉集という側面から持っている関心は、人麻呂が天武天皇の挽歌は作っ

ないけれども、草壁皇子の挽歌を作っている。そして恐らく人麻呂が本格的な挽歌を作ったのは、たぶんこれが最初ではないかと——これは専門の先生方にあるいは笑われるのではないかと思いますが——考えます。で、天武の亡くなった時と草壁皇子の亡くなった時との間には、三年足らずの隔たりしかないのでありますが、そのことに私はかねてより興味を持っているのであります。このことについては、もう万葉学者の間で解決済みなのではないかと恐れるのですが、「めくら蛇に怖じず」、少々お話をさせていただこうと思います。

草壁皇子は六六二年、大津、即ち今日の博多で、大海人皇子を父、鷗野皇女を母として誕生。六七一年、大海人が皇太弟を辞し、吉野へ隠棲する時に母鷗野と共に従ったのであります。翌六七二年、壬申の乱が始まります

と、大海人に従って東国へ行ったものと思われまゝ。日本書紀によりますと、そのあと、天武八年、六七九年に、天武・持統夫妻が諸皇子を吉野に集めて、皆一母同産の如くに可愛がることを言明。それを受けて草壁が諸皇子を代表して、我々は皆天武夫妻のことをよく聞き、仲たがいせず兄弟睦じくやうて行く、という誓いを立て、そうして更に二年後の天武十年、六八一年、天武夫妻は漸くこの草壁皇子を皇太子に立てるわけでありまゝ。恐らく草壁を皇太子にすることについて、色々思惑もあり、簡単に事が運ばなかつたものと思われまゝ。しかもその二年後、六八三年には草壁の一歳下の弟、大津皇子に「朝政を聴かせ」ております。大津の母は鷗野の姉、大田でありますが、このことは一体何を意味するのか、恐らく大津が草壁の次の皇太子になるという意味合いを持つのではないかと思うのです。これは大津の生ませたいへん良く、もし母が健在であればそちらが皇后になつた筈です。天武はこの大津を無視することが出来なかつた。しかも伝えられるところによると、大津の方が人物としてはるかに優れておつたのではないかと思われまゝ。しかしながら大津に朝政を聴かせるといふようなことをすれば、行く行くはまた兄弟の間に皇位の問題が起こることは必至です。天武がそれを知らない筈はな

い。それにもかかわらずそうせざるを得なかつた、といふのは、まだ直系相続などというルールは確立していないこと、それから大津は人物であり、かつ人望が厚い。懐風藻の伝によると、清濁併せ呑む俠氣のある人物であり、人気がある。従つてこれを疎外することは、またそれなりに問題を将来に残すことになる。色々々々悩んだ挙句に天武はこの措置をとつたものと思われまゝ。更に二年後の天武十四年、六八五年、正月、新たな冠位を定め、草壁に「浄広彦」、大津には「浄大弐」を与えていまゝ。ところがその翌年五月の頃から、天武天皇の病状が思わしくなく、五月には天下に大赦し、あるいは色々な功德を行う、ということが日本書紀に見えます。かなり病は重かつたのであります。で、七月の十五日には、天下のことは大小を問はず、悉く皇后と皇太子に啓さしむ、という措置を決めております。つまり事実上、政權を皇后・皇太子親子に、天武は委ねたわけでありまゝ。そして九月九日に天武天皇は遂に亡くなるのですが、その前後から大津の謀反の噂が流れるのであります。これも、或る程度の種はあつたもので、全く事実無根というのではないと思ひますが、日本書紀では「皇太子を謀反かたむけむとす」つまり皇太子に対する謀反だと言つておるわけです。「謀反」といふ文字は、律の八虐の第一に挙げ

でありまして、君主、国家元首に対する反逆罪を言うのであります。即ち日本書紀は皇太子草壁を、国家元首、つまり天皇に擬えているわけでありませう。勿論これは當時そう言われたのか、日本書紀編纂の時にそういうふうの評価したのか、問題は残りますが、とにかく事実上の主権者である皇太子に対して何等かの工作を企てたのであり、十月の二日にはこれが発覚し、死を賜うということになります。十一月に入りますと、大津の姉の大伯皇女が伊勢から、斎宮の任を解かれて帰って来る。こういう次第であります。

さてその草壁ですが、日本書紀によれば持統元年、六八七年正月以降、公卿・百寮人を率いて、天武天皇の殯宮においてみねたてまつる、という殯宮行事を繰り返す行うのであります。正月は一日と五日と二回、五月二十二日、それから十月二十二日。以上持統元年には都合四回、皇太子が先頭に立って、殯宮の儀が重ねられます。翌持統二年、六八八年、これも正月一日、また殯宮に慟哭する。それからとんで十一月の四日に、草壁皇子はまた殯宮に奉仕しております。ところが同じ十一月の十一日、丁度一週間あとでありますが、この日、阿倍御主人、大伴御行が殯宮に誅ります。それで儀式が終わって、大内陵に天武天皇を葬ったとあります。丁度亡くな

ってから二年二ヶ月、山陵を築き始めてからは一年ちょっとということになります。そのあとは翌持統三年の四月十三日、「草壁皇子尊薨りましぬ」と出て来るのであります。

以上が草壁皇子に関して、日本書紀の伝えるところのあらましです。そういたしますと、この草壁皇子の事蹟として日本書紀の伝えるところは、吉野の会盟と六回にわたり天武の殯宮に奉仕したという事実だけなのです。この他には草壁皇子は何をした、ということが具体的に殆ど伝わっていないのであります。この皇子はのちに七五八年、曾孫孝謙女帝から、岡宮御宇天皇と追尊されましたが、それ以外は後世においても特に取り上げられることのない人物であります。御承知のように万葉集にはその作品はわずか一首、一一〇番の歌一つ。しかしながら、この草壁皇子に対する人麻呂の挽歌、一六七から一六九と一七〇、それから舍人等が皇子のために詠んだ挽歌というのが、一七一から一九三まで、万葉集には伝えられておるわけであります。

一 草壁皇子について以上のような点をお話いたしましたので、その次の問題であります。草壁はなぜ正式に天皇にはならなかったのか、このことを少し考えてみたいと思ひます。

さて、立太子した時、この草壁は二十歳。父天武天皇が亡くなった時は二十五歳であります。すぐに天皇になるのに歳に不足はなかつた筈であります。それなのに何故即位が遅れたか。先ず考えられるのは、この天武崩後ただちに起つた大津皇子の謀反事件であります。私は大津に謀反の気が全然なかつたとは考えません。しかしそれが果して謀反と名付けるに相応しいような大それた計物であつたのか、あるいはそれほどではない些細なことであつたのか、この辺りになると自信はありませんが、ともかく持統側がこの大津の動きをうまく利用して、大津を陥れるように事を運んだ。些細な事柄であるとすれば、それを段々大袈裟なものに捏ち上げて行く、というような工作はやつた可能性があらうかと思われまふ。その結果大津は処刑されるわけですが、恐らくその余りにも露骨なやり方が、他の諸皇子、あるいは多くの人々の反発を買い、大津が人々に同情され、逆に草壁がただちに即位するには、どうも具合が悪い、そんな雰囲気が生まれたのかも知れない。あるいは草壁自身について考えてみますと、もうこの頃から病弱で、ただちに即位するには体力力が耐えないと判断された、そういうこともあつたのではないかと思ひます。ともあれ、このような次第でありますから、ひとまず即位を実現するまでに多

少の時間を置く。つまりそれは体力の回復とか、あるいは大津問題のほとぼりが冷めるまでとか、多少の時間をかせぐ必要を、持統あるいは草壁の側で感じとつたのではないかと想像するのであります。そこで、その時間をかせぐと同時に、その間に、草壁皇子が正統な後継者であることを、極力内外にアピールする、そういう工作をする必要を感じたのではないだらうかと思ひます。そのために持統皇太后は、わが子草壁皇太子を、天武天皇の葬儀の委員長、葬儀執行の責任者に任じているのではないでしょう。天皇の葬儀は、従来でも比較的殯の期間の長いのがありますけれども、天武のそれは異常に長いわけです。二年二ヶ月。勿論その間に山陵を築くという工事が必要だからだと言えないことはないのですが、実は山陵築造の工事は、天武が亡くなってから一年余り経ってから着手しているのです。どうも殯をわざと長くやつたと考えざるを得ません。

この天武の葬儀を長期にわたたり、また厳かに、大々的にやるということは、勿論、天武天皇が偉大な天子であつたことを、内外に示すためでもあります。天武が正統な君主であることは、れっきとした事実であつて、これを今さら否定することは出来ないわけでありまふ。だがその葬儀を執行する責任者草壁にとつては、これは非

常にプラスになる。天武の存在を強調し、その正統性をいやが上にも主張するということは、同時に草壁の正統性を繰り返し繰り返し強調し確認させるといふ営みに他ならないわけであります。私はこの天武の葬儀が無事終了し、草壁の正統性の確認、これについて持統が一応納得した、その次の段階で徐ろに草壁の即位式を実現する手筈を整えていたのではないかと思うのであります。どうしてそう言えるかと申しますと、実は日本書紀の持統天皇三年正月一日の条に、こういう記事が出て来るのであります。

天皇朝三万国于前殿。

この「万国」というのは日本国内の国々という意味であります。それから「前殿」というのはたぶん、所謂大極殿ということであります。つまり諸国から使者を集めて、所謂朝集の儀式を行うということであります。これらのことはまだ当時としては年行事ではありませんから、この時特に諸国から使者を集めたものと思われませんが、そのためには相当前から全国に対して通知しなければ、正月元日に全部集まるというわけには行きません。ところでこのような諸国朝集ということを持統三年正月に行なっているということの意味は何でしょうか。

この主語の「天皇」というのは勿論追記でして、これ

は持統皇太后を指すわけであります。すると、ここには皇太子が出て来ないわけでありまして、主語は皇太后であります。持統天皇が四年正月一日に即位するまでの三年間は、所謂称制の時期でありますが、この三年間に、持統を「天皇」と表現した所が、私が調べたところでは六ヶ所あるのであります。それはいちいち申しません。一つはこれです。元年八月の条にも一つあります。これは天皇、つまり持統が使を諸大寺に遣わして、僧等に天武天皇の衣服で作った袈裟を贈ったということが書いてあります。あとは吉野に行った還ったということに、天皇と三回出て来ます。それから高安城に行幸したという所に主語として天皇と出て来ます。それだけなのですが、そうして見ますと、いわば主権に関わる行為としてはここ一ヶ所。かように非常に重要な行為に関して彼女の事は出て来るが、皇太子の事が出て来ない。日並知皇子と言われた皇太子ですから出て来ても不思議はないのに、出て来ないのであります。そこで私はこの時、皇太子は既に病んで出席不可能であつたらうと想像するわけであります。勿論、「万国をして前殿に朝せしめる」のは、草壁がいよいよ天皇になるという重要な準備作業であつた筈です。母親である持統はその息子のためにお膳立てをしたのでありましょうが、結局草壁は出席出来

なかつた。こう想像するのであります。この想像の根拠は、実は前年の十一月四日、草壁が殯宮に慟哭る、というのを先程申しましたが、実は一番大事な、それから一週間後の十一月十一日の大内の山陵への埋葬式には、皇太子は出ていないのであります。切角葬儀の最高責任者として、草壁が次代の正統君主であることを人々に広く印象付けようとした持統の試みも、これで画竜点睛を欠いたと言わなければなりません。もうこの頃、草壁は病に臥すようになったのではないか。諸国への朝集の命令は恐らくそれよりも先に出ていたでしょう。持統も息子の病気の回復を期待して、諸国朝集は予定通りやることにしていた。ところが年が明けてもどうにもならない。こういうことで草壁はとうとうこの大事な朝集の儀式にも出席不可能であつたと思うのであります。

さて、日本書紀には三年の三月二四日、天下に大赦することが見えるのであります。ところで、これが何のための大赦であるかは書紀に記されておりません。私どもが作った岩波の日本書紀の注や、日本書紀通釈など先行の注釈書も見ましたが、全く触れるところがありません。が、これは先ず間違いなく、草壁の病氣平癒を祈つての大赦であろうと想像いたします。これによってむしろ、草壁の病の篤きことが窺われると思ひます。そして

その祈願の甲斐もなく、四月十三日、つまりそれから二十日後には皇子が亡くなるということでありませう。

なお、これに關してもう一つ、三年正月で注目すべき事実があります。それは、この三年正月には、後世の年中行事で天皇と関わるものが出てまいります。例えば正月二日の「乙卯、大学寮献杖八十枚」。卯杖の儀式は日本書紀では初見です。恐らく草壁が健在であれば、この儀式にも彼は出席しておるでしょう。それから十五日には「薪の儀」というのが十三年ぶりに行われます。これも後世は年中行事の一つであります。これらは恐らく宮廷行事であると同時に、天皇にまつわる年中行事で、持統が草壁皇太子のために、計画しているのだと思われまゝです。ですから持統は、それを自らが代行することになる、その過程でもし草壁に事故があれば自分が天皇になる、という気持ちに傾いて行くのではないかと思われるのであります。勿論その決定的なことは亡くなった後であります。勿論その決定的なことは亡くなった後であります。勿論その決定的なことは亡くなった後であります。勿論その決定的なことは亡くなった後であります。勿論その決定的なことは亡くなった後であります。

を充電するのだ、といわれますが、私も仮にそういう説に則って考えますと、これが三年正月から始まっているのは、彼女に、皇太子に事故があった時には、自分が天皇になるという心の準備が出来つつあることを示しているのではないかと想像するわけがあります。

想像に想像を重ねましたから、余り歴史学的には根拠がないことも多いのですが、草壁が何故即位しなかったかという疑問に対する、私なりの回答は、今申しましたように、持統・草壁母子はその目的で鋭意準備をし、時間をかせいでおったが、いざという直前になって、草壁が病に倒れ、遂に即位の機会を掴むことが出来なかった。こういうことであります。

なお、草壁皇子につきましては、先程申しましたように、挽歌の問題もあります、実は「虚と実」という問題については、そちらの方を一つ扱ってみなければならぬと思うのですが、私には余り適切な回答が用意出来なかった。無能力でありまして、それは用意出来なかったのであります。それで、本當の思いつきでありまして、これは皆様に叩き台にさせていただく、という心算で、とにかく門外漢ですから恥ずかしいことはない。厚かましく申したいと思えます。

私は草壁の挽歌は、多くの万葉学者が言われるよう

に、その前半の部分が、古事記の神話、——日本書紀も含めてですが——、古事記の神話とたいへん良く似ている。あるいは六月晦日の大祓の祝詞などもたいへん良く似ておると思います。つまりこれは古事記の天地開闢とか、あるいは天孫降臨などの神話、——記紀神話、

——少なくともその原型を人麻呂が踏まえて作ったものではないか。古事記は序文の語るところによれば、天武がその内容を刪定し、稗田阿礼をして誦習せしめたといわれますから、従って天武朝にほぼその形を整えたわけでありませんが、次いで天武が亡くなり、これを筆録することも暫くはなかったもので、阿礼の誦習するところの内容は、一般にはなかなか周知されなかったのではないか。人麻呂のような、その頃、言わば駆け出しの下級官人であるところの宮廷歌人の耳に、この天地開闢、天孫降臨などの神話の原型が伝えられるようになるのは、従って天武崩御の少しあとであろう。そのように考えれば、人麻呂に天武に対する挽歌がなくて、草壁に対する挽歌があるというのも、或る程度判るような気がする。尤も天武に対して作らなかつたというこの理由は別に説明しなければならぬのでありますが、ともかく草壁に対する挽歌が作られたということは、この時点としては一応理解出来る。

ところでその草壁挽歌の内容は、高市皇子に対する挽歌の内容と大変違ふところがあります。高市皇子は言うまでもなく壬申の乱において輝かしい業績をあげた人、そして持統朝にはやがて太政大臣にもなった人物であります。従つて挽歌の中に、その具体的な業績を歌いあげることが容易であつた。ところが今申しましたように、草壁皇子は日本書紀による限り、これといった事蹟のない人であります。二十八歳まで生きたのに、書紀によれば吉野の会盟と天武天皇の殯宮に六回奉仕したことが出ているだけで、あとは何をやったかさっぱり判らない。恐らくこれは、彼が生来病弱であつたことも開りがあると思いますが、だからこそ天地開闢、天孫降臨などの神話によつて、草壁皇子がそういう神話の時代以来の連綿たる皇統を受け継ぐ可き人であつたと、つまりそう言わざるを得ないわけです。彼自身の能力ではなくて、そういう他律的なことでこの人を譽めあげる他はなかつたのであろう。その頃になると、古事記の内容が、人麻呂が挽歌を作るのに利用し得る程度に、下級官人たちの耳にも入るようになったのであろう。

全く想像にもならない妄想であります、そんなふうな、思つたことを御報告いたしておきたいと思ひます。

〔補足〕

集合写真で一人だけそっぽを向いている人というのが時々ありますが、私の話はだいたいそんなものです。

さて、先程大久保先生は、有間皇子の問題についてお取りあげになりました。それで私が一寸感じたことを申し上げたいと思ひます。

有間皇子については、山本健吉さんが、皇子を主題にした叙事詩があつたというふうにお考えになつています。中西さんは「有間皇子伝」というようなもの存在が推測されると言われている、ということですが、歴史家で具体的な、有間を主題にした叙事詩とか、有間皇子伝というものをご想定した人はたぶんいないのではないかと思ひますが、不勉強ですからその点はよく分りませぬ。有間皇子については日本書紀を考る限り、本文のところどころに「或本に云う」という注がありまして、異伝のあつたことは推測されますが、その有間皇子の記事の一番最後に、或本というのが重ねて二つ引いてあるわけです。そのあとの方の或本、(これは「或る本に云はく、有間皇子曰はく「先ず宮室を燔きて、五百人を以て、一日兩夜、牟婁津を邀へて、疾く船師を以て、淡路國を断らむ。牟圍るが如くならしめば、其の事成し易けむ」といふ。或人諫めて曰はく「可からじ。計る所は既に然れども、徳無し。方に今

皇子、年始めて十九。未だ成人に及らず。成人に至りて、其の徳を得べし」といふ。他日に、有間皇子、一の判事と、謀反る時に、皇子の案机の脚、故無くして自づからに断れぬ。其の謾止まずして、遂に誅戮されぬといふ。こういう或本の文章が引用してあるわけがありますが、この文章を原文で見ますと、極めて整然とした四字句で文章を成しておりまして、これで後になってかなり整えた人があるということが判ります。書紀本文はそのように整然とした文章でありませんが、所謂散文であります、これなどは一寸見た限りでは韻文的な感さえるわけであります。ですから有間皇子に関して、散文的な資料の他に、かなり整えた文章を作った人がいるらしい、ということが判るように思います。ただし、それは或る程度のちの段階であります。と申しますのは、文中の「判事」というのは確實なところでは、浄御原令にもとづく持統三年の、判事任命の記事が、一番早いものであります。従ってこの四字句で整えられた文章自体は、持統朝を溯るようなことは無い、先ずかなりの時間が経ってから、後人が文章を整えたものだろう。従ってそういう中に、多少の虚構を交えた有間伝というようものが、あってもおかしくはないと思えますが、ただそこまで言い切る自信はないということでもあります。

それからまたこの草壁に帰りますと、御承知のように「日並知皇子尊」とも呼ばれますが、どうもこれは生前の名前ではない、これも一種の贈り名だろうと思われます。ただ人麻呂の歌にはもう出て来るのでありますから、死後間もなくこの贈り名が定められたのであります。ところが、贈り名を定めたのは生母である持統天皇その人であろうと思えます。これは亡くなったあとでも、彼が正統な支配者、ないしは正統な君主たるべき人であったということを強調したためであって、それは即ち、その遺児である軽皇子の将来を考えての布石でもあるといふふうに、考えておるわけです。

それから大津皇子に関して、私の一寸感じたことを申し上げます。今、大久保先生もおっしゃいましたが、日本書紀の中に、「詩賦のおこり大津より始れり」ということが書いてある、ということ、これは事実とはたがうわけですが、そういう記事が見えることは注目される、というお話でありました。私もその点に関しては同感なのですが、特にこの問題だけでなくて、持統即位前紀には、皇子の容貌とか才能とか、あるいは文筆を好むというようなところまで筆を進めておりまして、これが懐風藻の伝記にある分には我々も少しもおかしいとは思わないのですが、日本書紀の成立自体が、持統天皇の

強い意向を受けていることを思うと、その持統紀に大津をこれだけ賞揚する文章を載せた、あるいは載せざるを得なかったということには一層注目させられます。勿論、書紀編纂の最終段階では持統天皇は既にこの世にならないうわけですけれども、持統天皇とはそれこそ一味同心、一心同体であった不比等は健在であった。それにもかかわらずこういう文章が載った、というようなところは、やはり書紀編纂上の秘密が一つ、秘められているように思います。

それから緒方先生のお話の中に、弓削皇子と人麻呂が接近しすぎた云々というくだりがございましたが、弓削皇子が持統から睨まれて刑死したという説は、梅原氏の説であります。その説の成り立ち難いことは、『万葉集研究』の第六集、「弓削皇子について」という小論文に書いておきました。私は梅原さんに、コピーもお送りしましたが、一言半句反論がない。反論出来ないのか、完全に無視されたのか、のいずれかではありますが、皆様にはあれを読んでもいただけない。歴史家のはしくれである私は弓削皇子刑死説をどう受け止めているか、ということを是非お読みいただいて、その上でまた御批判をいただけるかと大変有難いと思います。そこでは刑死説の成り立ち難いことを、それこそ実証的手続きをもって書い

た心算であります。他にはとるところもないのですが、是非それを一読していただきたいと、最後はピーアールで終わります。